

キャリア教育の視点を取り入れた小学校家庭科構想[†]

人見佳代子*・赤塚 朋子**

壬生町立藤井小学校*

宇都宮大学教育学部**

概要

今日の社会背景をふまえ、キャリア教育の導入にあたって、小学校では児童にどのような指導をすればよいのだろうか。特に、教科との関連をどのようにとらえればよいのだろうか。キャリア教育は児童生徒の職業生活における自立をめざしている教育であると考え、このことから考えると、家庭科は生活全体の自立をめざしている教育であるので教科の中でも関連が深い。そこで、家庭科教育をキャリア教育の視点で直し、その可能性を検討した。

研究にあたっては、まず、キャリア教育の歴史や定義、小学校でのキャリア教育の意義を探った。そして、実態調査や授業実践を通して家庭科におけるキャリア教育を検討し、指導計画を作成した。また、家庭科は第5・6学年での学習であるので、1～4学年については、学習内容において家庭科とのつながりが深いと思われる生活科と総合的な学習の時間についての指導計画を提案した。

キーワード: キャリア教育 小学校 家庭科

1. キャリア教育とは

(1) キャリア教育の歴史

①アメリカにおけるキャリア教育の歴史

1971年 シドニー・マーランドが連邦教育局長官に就任し、「すべての教育はキャリア教育であるべきである。」と述べたことでアメリカのキャリア教育が始まったとされている。

1974年 初等中等教育法改正法が連邦議会により成立し、キャリア教育に関する規定が盛り込まれた。

1979年 「キャリア教育奨励法」が成立する。その後、職業訓練パートナーシップ法(1982)パーキンス職業教育法(1984)が制定され、1989年の全国キャリア開発指針、1994年の学校から職業への移行機会法などの施策が講じられている。

②日本におけるキャリア教育の歴史

日本において、「キャリア教育」という言葉は1999年の中央教育審議会答申『初等中等教育と高等教育

との接続の改善について』で初めて登場したとされている。ここで、「小学校段階から発達段階に応じてキャリア教育を実施する必要がある。」と提言されたのである。また、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』2004では、「進路指導の取組は、キャリア教育の中核をなすものである。(中略)職業教育は、進路指導とともにキャリア教育の中核をなすものである」と示されている。2003年には「若者自立・挑戦戦略会議」において「若者自立・挑戦プラン」がまとめられ、その中でキャリア教育の推進が重要な柱として位置づけられた。また、初等中等教育におけるキャリア教育の在り方についての協力者会議が設けられ、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」2004が公表された。そして、2006年文部科学省より『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』が出され、キャリア教育を具体的に進めていく上でのよりどころとなっている。

(2) キャリア教育の定義

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 2004.1.28」では、下のような定義

[†] Kayoko HITOMI*, Tomoko AKATSUKA** : Home Economics Education design, which takes in viewpoint of Career Education in Elementary School.

* Fujii Elementary School

** Faculty of Education, Utsunomiya University

がなされた。

「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

この定義が、文部科学省『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』（2006.11）でも用いられている。

（3）キャリア教育とは

キャリア教育の歴史や様々な定義をふまえて、キャリア教育に対する自分なりの考え方を示したい。日本社会の将来を担っていく子どもたちが、よりよい生き方を求め、自立していく過程で、職業を選択することはとても重要なことである。自己を理解し、自分らしく生きていけるような仕事を選択できることがのぞましい。若者がそのような場にたったとき、よりどころとなるのがキャリア教育ではないか。キャリア教育によって育てられてきた能力を発揮しながら職業生活に入り、自立した生活を送れるようにするためになされるものと考え。そこで、本研究では、次のように定義した。

児童・生徒が将来に向かって自分らしい生き方を実現していく過程において、それぞれの発達段階に応じた支援を行っていく教育

2. 小学校におけるキャリア教育

小学校におけるキャリア教育の在り方の検討に際し、そのよりどころとして、文部科学省『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』（2006.11）をもとにまとめた。これには、児童生徒が将来自立した社会人・職業人として生きていくために必要な能力・態度、資質として、下の項目があげられている。

- ・人間関係形成能力
【自他の理解能力 コミュニケーション能力】
- ・情報活用能力
【情報収集・探索能力 職業理解能力】
- ・将来設計能力
【役割把握・認識能力 計画実行能力】
- ・意思決定能力 【選択能力 課題解決能力】

これらをもとに、キャリア教育の視点を取り入れた指導計画を作成することとした。

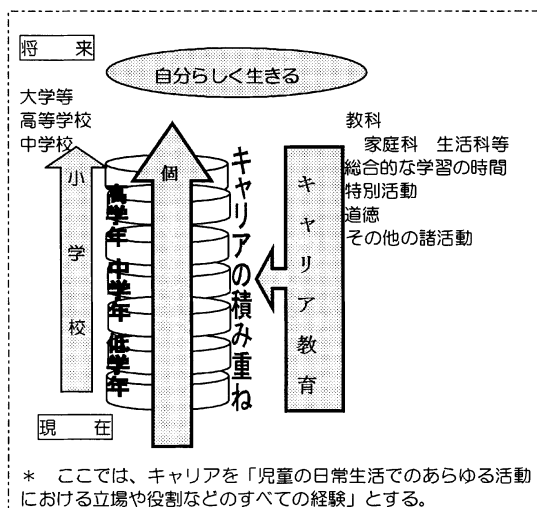
また、キャリア教育の意義について考えていくに当たり、まず、キャリア教育に関連すると思われる学校生活における児童の発達段階の特徴を押さえる。

【キャリア教育に関わる学校生活における主な児童の姿と関連する能力】

低 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい環境（人・物）と出会い、そこで新しい人間関係をつくるために、コミュニケーション能力が必要となる。 【人間関係形成能力】〈コミュニケーション能力〉 ・係活動や当番の仕事への取り組みにより、集団（学級）における自分の役割を把握する。 【将来設計能力】〈役割把握・認識能力〉 ・集団生活において他者との関わりを持つ中で、規範意識をもつようになる。 【意志決定能力】〈選択能力〉 ・学校や自分の住んでいる地域についての学習により、身近な人の仕事について知るようになる。【情報活用能力】〈情報収集・探索能力〉〈職業理解能力〉
中 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との関わりが活発になり、その中で自分自身を知ろうとする。 【人間関係形成能力】〈自他の理解能力〉〈コミュニケーション能力〉 ・委員会活動等で、学級だけでなく、より大きい集団である学校の中での役割が与えられる。 【将来設計能力】〈役割把握・認識能力〉 ・社会科等の学習により、世の中のいろいろな仕事について知る。 【情報活用能力】〈情報収集・探索能力〉〈職業理解能力〉 ・自分の課題をもちそれを解決するための方法を考えることができるようになる。（総合的な学習への取り組み等により） 【意志決定能力】〈課題解決能力〉
高 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・高学年として、いろいろな役割を与えられるようになり、責任をもって仕事をやり遂げることを要求され、その大切さを知る。【将来設計能力】〈役割把握・認識能力〉
高 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・友人関係の難しさが出てくる時期になり、自分と友達との関係を考え、自己の理解と共に他者を理解しようとする。 【人間関係形成能力】〈自他の理解能力〉〈コミュニケーション能力〉 ・中学校への進学を控え、進路について意識するようになる。【意志決定能力】〈選択能力〉 ・自己理解をすることにより、将来の夢が変化してくる。【人間関係形成能力】〈自他の理解能力〉【情報活用能力】〈情報収集・探索能力〉〈職業理解能力〉

小学校では、それまで主に家族と関わりながら家庭を中心に生活していた状態から、学校へと生活の範囲が広がる。それに伴って、友達や先生、上級生・下級生との関わることとなる。また、地域に関する学習や体験活動等により様々な人との関わりも増える。このように、生活の場が広がり、児童はキャリアを積み重ねていく。その積み重ねの過程においては、キャリア教育に視点をおいた支援が必要になるのではないかと考える。児童は、学習・様々な体験・多様な人との関わりにおいて、自分を見つめ、自分という人間を理解していく。そのことにより、自分らしさを見つけ、将来、自分らしい生き方をしたいと考えるのではないかと思う。そこで、小学校でのキャリア教育の意義をつぎのようにとらえる。

一人一人の児童がめざす「自分らしい生き方づくり」の過程において、それぞれの発達段階に応じた支援を学校教育全般において行っていくこと



このように、キャリア教育は、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間やその他の諸活動等、学校教育全般においてなされるものである。本研究では、家庭科を中心に行っていることから、家庭科と関連が深いと思われる生活科・総合的な学習との関連を考えたい。

家庭科は、第5学年と第6学年で実施されている教科であるが、小学校学習指導要領生活科の目標にある「自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付け

させ、自立への基礎を養う。」という文言は、家庭科が目標とすることや学習内容と重なるものである。それゆえ「低学年から継続的に家庭生活に関する学習を積み上げることによって、児童の理解が深まり、実践力の習得がいつそう効果的に図られることが期待される。」¹⁾のである。生活科の内容には、家庭生活や家族についての学習があることから、家庭科との関連が深く、生活科の学習で培った力を家庭科の学習でより高めていくことが可能であると思われる。

生活科の学習と5・6年での家庭科をつなぐ役割を果たすのは「総合的な学習」であると思われる。全国小中学校環境教育研究会『実践 環境教育で取り組む「総合的な学習」』では、「子どもたちが総合学習をとおして、地域社会の一構成員として、社会参加するのである。」²⁾と述べられている。家庭科の到達目標は、市民を育てることである。また、家庭科は生活を総合的に扱う教科である。総合的な学習の時間のねらいには、各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること、と示されている。さらに、環境、福祉、食との関連での健康など、学習指導要領に示されている内容と家庭科の学習内容は重なる部分が見られる。このようなことから、生活科と総合的な学習で育成した力が家庭科でさらに確かなものとなることが期待される。

3. キャリア教育の視点を取り入れた家庭科教育

(1) 小学校における家庭科教育

ここでは、いくつかの文献から家庭科がどのようにとらえられているかをあげてみたい。

「家庭科は、生活を工夫創造する能力と実践的態度の育成を目指す教科といえる。(中略)家庭科で目指す生活を工夫創造する能力とは、主体的に生活文化・生活様式を創造する能力といえることができるであろう」³⁾

「経験しながら発見し、ああそうか、わかった、と実感し知識を得ている授業です。経験が知識(科学・学問)と結びついていくおもしろさといえましょう。家庭科を学ぶおもしろさの一つがここにあります。」⁴⁾

「家庭科教育は、いつの時代にも個人・家族の発達を促しながら現実の生活を直視し、自立(律)して

自分らしく生活できる生活者＝消費者を育成すること、より良い家庭生活を創造できる人の育成といった、生き生きと自己実現を図ることのできる人間育成がメインテーマからはずれたことはない。」⁵⁾

「生活が総合的であり、家庭科の学びが総合的であり、家庭科という教科が総合的である。ゆえに、生活を総合的にとらえる視点がなければ、家庭科教育は成り立たない。」⁶⁾

「学校における家庭科教育は意図的、計画的であり、体系的に組み立てられた一定レベルの知識・技能を育成し、科学的な生活認識を育てる。また、多角的視点から家庭生活をとらえるものであり、自己の家族を外側から客観的に見なおす機会を提供する。さらに、友達との相互作用があり、集団での学びがある。」⁷⁾

以上のことをふまえて、家庭科を下のようにとらえる。

現在また将来において、自らの生活を主体的によりよいものとしていくために必要な資質や能力を育む教科である

このことから、学校教育の中では、自分の生活を振り返りながら、家庭生活に関心を持ち、現在そして将来の自分の生活を考え、よりよい生活を送りたいという意欲を持たせたいと考える。そして、学校で学んだことが生活の中で実践されることが大切である。そのために、児童の実態を踏まえながら、家庭生活での実践化に結びつくような指導の工夫をしていく必要がある。また、理論(知識)だけが備わっていても、実生活に生かされなければ意味を成さない。学習の過程での体験で技能が身についたとしても、正しい理論の上に立つ体験でなければ実生活に生かすことは難しい。生活のどの場面で、体験により身につけた技能を実践すべきかが理論的にわかっている必要がある。さらに、家庭科の学習内容は家庭の中にとどまっているものではなく、常に社会とつながっており、私たち人間の生活を総合的にとらえた内容である。すなわち、孤立した家庭ということではなく社会の変化に対応しながら、地域や社会とのつながりを考えていく必要もある。自分が家庭の中での役割を果たすだけでなく、地域や社会の中で自分の適性にに応じて働きながら貢献していく。そのことが、自分の生活をよりよくし、豊か(経済的・精神的の両面において)にすることにもつながるの

ではないかと考える。家庭科を通して、児童が現在、将来の生活に主体的に関わっていきける能力や態度を育成していきたい。

(2) 家庭科教育とキャリア教育の関連

家庭科教育とキャリア教育の関連については、アメリカにおける先行研究がある。文献⁸⁾をもとにまとめてみたい。

1997年、米国家庭科教育学会により、米国中学校家庭科におけるキャリア教育プログラム「Career Exploration in the Middle School」が開発された。これには、家庭科におけるキャリア教育が実践可能となるように理論と方法が示されている。また、家庭科におけるキャリア教育で育成する能力として次のことをあげている。

- ①肯定的自己概念の影響に関する知識
- ②就労における学業成績の価値についての知識
- ③仕事と学習の関係の理解
- ④キャリア情報の探し方、その理解と運用の技能
- ⑤意志決定の技能
- ⑥生活における役割の相互関連の知識
- ⑦様々な職業と男性、女性の性役割の変化の知識
- ⑧就労計画のプロセスの理解

1998年には、家庭科ナショナルスタンダードが開発されている。これは、教授・学習活動における規準となっている。家庭科ナショナルスタンダードの目的は、「生涯を通して、家族、コミュニティ、職業生活にかかわる、個人や家族としての能力を高めるために寄与すること」⁹⁾である。それによると、例えば、学習領域1家族とキャリア、コミュニティの関連の全体目標には、家族、コミュニティ、キャリアにおける生活の多様な役割と責任を総合的にとらえる、と示されている。これには、16の領域があり、衣食住、家族、消費に加えて、設備管理、接待、人間関係などの領域が取り扱われており、これは我が国の家庭科教育よりも広い領域である。アメリカでは、広範囲の各領域でキャリア教育を取り入れていくことにより「伝統的あるいは従来の家庭科の領域にとらわれず、幅広く、より深度のあるキャリア教育を実行することができると推察される」¹⁰⁾ということからも、家庭科とキャリア教育の関連性の深さがうかがわれる。

また、「家庭科におけるキャリア教育とは、人の一生といった生涯発達の中で、家庭生活、職業生活、市民生活など、自立した一人の人間としての全生活

における役割、生き方を視野に入れた学習であると
考えられる。そのため、子どもに人の一生を考えさ
せる学習を通して、人間としての真の自立とは何か、
生活的自立、経済的自立、精神的自立、将来の生活
設計について考えさせることが、家庭科における主
体的に生きる、生き方を探求する学習となる。」¹¹⁾
というように、家庭科は衣食住に関する知識や技能
を習得するだけでなく、児童生徒の自立を促す内容

を含む教科である。このように、小学校におけるキ
ャリア教育と家庭科教育は深く関わっているのであ
る。

これらのことふまえて、家庭科教育で身につけさ
せたい能力とキャリア教育に関わる能力を単元学習
の段階に沿って表1のようにとらえた。

表1 家庭科とキャリア教育に関する能力

段 階	内 容	家庭科に関する能力	キャリア教育に関する能力
見 つ め る	自分や家族の生活、地域生活に目を向ける。	生活を理解する能力 ※自己理解能力	自他の理解能力
見 つ け る	よりよい生活をするための課題を見つける	生活問題に対する批判的能力 ※課題発見能力	課題解決能力
考 え る	課題を解決するための方法を考える。 ・必要な情報を得る。 ・適切な情報を選択する。 ・自分の生活にあてはめて考える。	生活問題解決の実践的能力 生活に関する意志決定能力 ※応用力	課題解決能力 情報収集・探索能力 選択能力 役割把握・認識能力
実 行 す る	考えた解決法を生活の中で実行してみる。	生活に関する意志決定能力 自立できる衣食住に関する生活技術	計画実行能力
振 り 返 る	実行したことの成果と課題をまとめて、発表し合うことで学習を広げる。	生活を理解する能力	コミュニケーション能力
改 善 す る	新たな課題の解決法を考え、改善する。	生活環境をよりよいものにする能力 ※創造力	課題解決能力
生 か す	改善した方法を実行し、よりよい生活を目指す。	人間関係を調整する能力 生活を自己管理する能力	計画実行能力

注) 家庭科に関する能力については、日本家庭科学会編著『家庭科の21世紀プラン』1997 家政教育社 で示されている家庭科教育で育てようとする能力についてのアンケートの調査項目を引用し、補足(※)をした。

以上のことから、小学校家庭科教育の目標の達成
を目指して指導をしていく過程で、教師がキャリア
教育の視点をより明確に意識しながら授業をしてい
くことによって、キャリア教育の目標の達成につな
げることができると考えられる。また、小学校家庭
科の学習は総合的であるのでキャリア教育の内容と
関連が深い。このように考えると、キャリア教育の
内容は、すでに家庭科教育の内容に包含されている
ととらえられる。

これらをふまえ、本研究においては、キャリア教

育の視点を取り入れた家庭科教育を

自分らしい生き方を実現し、自立した生活者とな
るために必要な能力を育む教育

ととらえる。ここでいう「生活者」とは、「よりよ
い生活をするための課題を解決する実践力を持ち、
家族や周りの人と関わりながら共に生活していく
者」とする。

4. キャリア教育に関わる実態調査・授業実践

(1) 実態調査

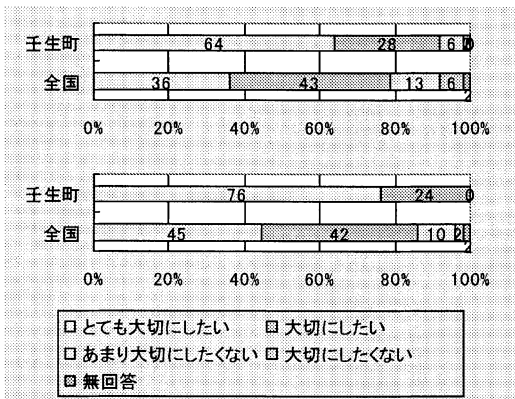
児童の生活や働くことに関する考え方を把握し、
発達段階とキャリア教育についての考え方の実態を
もとに、キャリア教育推進のための学習計画作成の
資料とすることを目的に、壬生町の各小学校の2・
4・6年生を対象とし、平成19年5月に調査を実施した。その一部を示す。

・実施人数 2年生 183名

3年生 191名 6年生 168名

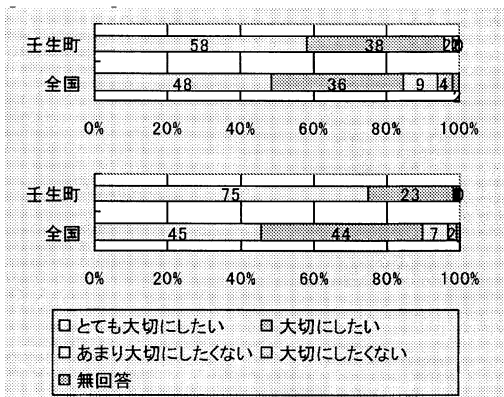
①他人の役に立つように働くこと

【上段 6年男子 下段 6年女子】



②仕事を持って働くこと

【上段 6年男子 下段 6年女子】



注) 全国のは 2002 年「日本家庭科教育学会」の研究報告書(研究代表者 お茶の水女子大学牧野カツコ)「児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果—」の一部を引用

調査結果全体から、壬生町の児童は、将来やってみみたい職業をもち、学校では係の仕事等に進んで取り組んでいることがわかった。また、働くことについて、大切にしたいと考えている児童が多いことから、キャリア教育を実施していくことにより、児童が将来への明るい希望を持てることにつながるのではないかと考える。

(2) 授業実践

第6学年において、キャリア教育の視点を取り入れた授業を実践した。

① 単元名 金銭や物の使い方を考えよう

② 目標 生活を支えるお金の大切さを知り、目的に合わせて適切に購入したり、身の回りの物の使い方を自分の生活との関わりで考えながら工夫したりすることができる。

③ 単元の評価規準

〔関心・意欲・態度〕

- ・日常生活での金銭の使い方に関心をもっている。
- ・身の回りの物の使い方に関心をもち、環境に配慮した使い方をしようとしている。

〔創意工夫〕

- ・購入しようとする物の品質や価格などを調べて、目的に合った購入ができるように工夫している。
- ・不要になった物を再利用するなど、身の回りの物の使い方を考えたり工夫したりしている。

〔技能〕

- ・目的に合った購入の計画をたてることができる。
- ・身の回りの物を有効に活用することができる。

〔知識・理解〕

- ・目的にあった物の選び方や適切な購入について理解している。
- ・身の回りの物や金銭の有効な活用について理解している。物を適切に購入したり大切に使用したりすることが、環境への配慮につながることを理解している。

④ 単元について

この単元は、学習指導要領の各学年の内容(7)「身の回りの物や金銭の計画的な使い方を考え、適切に買い物ができるようにする。」をうけたものである。消費者教育において家庭科の学習は重要な役割を果たしていると考えている。児童が現在、また将来においてよりよい生活を送るために、消費者としてどのように行動すればよいのか、そのよりどころとなる正しい知識や必要な技能を身につけさせることが大切である。学習を進めるにあたって、児童には、まず、生活していく上で金銭が必要であること、すなわち収入がなければ生活が成り立たないことを理解させる。そして、収入を得るための方法としての労働について考えさせることで、キャリア教育との関連をもたせたい。

単元の前半では、家計についてふれ、家族が楽しく安心して生活を送るためには、見通しをもった金銭のやりくりが必要であることや、そのために自分はどうなことに心がければいいかを考えさせる。その際、児童の家庭状況の違いについては十分に配慮

していききたい。金銭の大切さやその価値を理解させるために、生活していくためには何にどのくらいのお金が必要なのかを考えさせたり話し合わせたりする活動を取り入れ、金銭の大切さを理解した上で、自分の買い物のしかたを振り返りながら、目的に合わせた適切な物の購入の仕方を身につけさせたい。身の回りの物の使い方の学習においては、たくさんの物があふれている現在の状況や欲しい物が簡単に手に入ってしまう生活の中で、それらは、限られた資源や人々の労力によって作られているということをおさえる。そして、衣服の一生を例に物を有効に利用することを環境教育の視点からも考えさせたい。単元を通して、自分の生活と結びつけて考えたり話し合ったりさせることで、この学習で身につけた知識や技能が児童の生活のなかで働く力になるようにしていききたい。

⑤キャリア教育の視点とキャリア教育にかかわる能力

- ・日常生活での金銭の使い方や、自分の身のまわりの物の使い方について振り返る。

【人間関係形成能力】〈自他の理解能力〉

- ・生活に必要な費用を知ったり、物を購入する際、品質や価格など適切な購入のために必要な情報を得たりする。

【情報活用能力】〈情報収集・探索能力〉

- ・自分の生活との関わりから、生活をよりよくするための物や金銭の使い方を考える。

【意志決定能力】〈選択能力〉

③単元指導計画

〔時〕 本時のねらい	・主な学習活動 ☆キャリア教育にかかわる能力
〔1〕本時 ・お金の大切さを働くことと結びつけて考えることができる。	・お金の働きを知る。 ・家ではどんなことにお金を使っているか話し合い、働くことについて考える。 ☆意志決定能力
〔2〕 ・計画的な買い物の仕方を理解することができる。	・欲しい物があるときどうすればよいか考える。 ・買い物の計画をたてる。 ☆情報活用能力
〔3〕 ・持ち物調べを通して、物と資源の関係を話し合うことができる。	・持ち物調べの結果について話し合う。 ・物の一生について調べる。 ☆人間関係形成能力

〔4〕 ・身の回りの持ち物を見直し、生活に生かそうとする意欲をもつことができる。	・物を大切に使うにはどのような方法があるか考える。 ・限られた資源をまもるために、自分ができることを発表し、実践する。 意志決定能力
---	--

④本時の指導

〔題材名〕 お金について考えよう

〔本時のねらい〕 生活を支えるお金の大切さを知り、金銭の適切な使い方について考えることができる。

〔本時におけるキャリア教育の視点とキャリア教育に関わる能力〕

生活していくために必要な費用について知り、それらのお金を得る手段は労働によるものであることを理解することにより、将来において職業をもつことの大切さや必要性を考える。

【意志決定能力】

〔本時の展開における主な学習活動〕

- 1 本時の学習内容を知る。

生活を支えるお金について知り、お金の大切さを考えよう。

- 2 生活を支えるお金について考える。

(1) お金の働きについて知る。

(2) 家ではどんなことにお金が使われているか考える。

(3) 生活に必要なお金をどうやって得ているか確認する。

(4) 労働とお金について考える。

- 3 本時の学習を振り返る。

〔児童の反応 ～ワークシートより～〕

・お金のはたらきとお金の大切さがわかった。

・働くことは生活をするうえで大切なこと。

・働くのは大変だけれども大切なこと。

・生きていくのにとても大事、生活を支えること。

《授業の反省》

小学校学習指導要領解説家庭編内容(7)「身の回りの物や金銭の計画的な使い方を考え、適切に買い物ができるようにする」において、「消費者として主体的に日常生活で実践できるようにするための素地を育てておくようにする」とある。また、金融広報委員会によるお金に関する情報サイト『知るぽると』(<http://www.shiruporuto.jp/teach/school/program/program101.html>)では、金融教育について「お

金や金融の様々なはたらきを理解し、それを通じて自分の暮らしや社会について深く考え、自分の生き方や価値観を磨きながら、より豊かな生活やよりよい社会づくりに向けて、主体的に行動できる態度を養う教育である」と述べている。このことから、金銭教育では、児童が消費者として主体的に生活の中で行動できるための知識と技能を養うことが大切と考え、本時では、様々な情報の提供をした。そのため、教師の説明が多くなってしまい、児童に考えさせる場面が少ない展開になってしまった。次時は、買い物の計画を立てる学習内容になるので、児童が考えた買い物の計画を生活の中で生かしていく活動を取り入れたい。学習の振り返りでのワークシートへの記入内容を見ると、金銭の大切さや働き、流れなどに関する基本的なことや生活費を得るために働くことの必要性に気づくことができたのではないかと思う。今後も正しい金銭感覚を身につけたさせたり、消費者としての立場を考えさせたりしながら、家庭科における金銭教育のありかたを考えていきたい。

5. キャリア教育の視点を取り入れた家庭科構想

家庭科は第5・6学年での学習であるので、1～4学年については、学習内容において家庭科とのつながりが深いと思われる生活科と総合的な学習の時間について考えていくこととした。

生活科では、学習指導要領の目標で、キャリア教育に関わる能力と関連すると思われる内容を検討し、指導計画を作成した。総合的な学習の時間については、第3学年のテーマ「環境」においてキャリア教育の視点を取り入れた学習指導案を作成した。家庭科では、キャリア教育の視点を年間指導計画に取り入れ、キャリア教育と特に関連があると考えられる単元（第5学年「どのように生活しているかな」第6学年「地域とのつながりを広げよう」）の指導案を作成した。

6. 研究の成果と課題

- ・キャリア教育の歴史や定義について調べていく上でのキャリア教育の意義をとらえることができた。
- ・キャリア教育を小学校で教科の中にどのように取り入れ、また、展開していけばよいのかを生活科、

総合的な学習、家庭科との学習内容のつながりから考えることができた。

- ・小学校家庭科の学習内容をキャリア教育の視点から見直すことにより、家庭科の可能性を感じながら構想することができた。
- ・児童のキャリアの積み重ねをどう確認するかを検討し、よりよい支援につなげていく必要がある。
- ・中学校へつなげる小学校のキャリア教育のあり方の検討とともに、家庭・地域との連携や地域教材の活用等を考えていきたい。

最後になりましたが、お忙しい中、アンケートにご協力いただいた壬生町内の各小学校の先生方にお礼申し上げます。

(引用文献)

- 1) 教師養成研究会・家庭科教育学部会『小学校家庭科の研究』2000 学芸図書株式会社 p214
- 2) 全国小中学校環境教育研究会『実践 環境教育で取り組む「総合的な学習」』(2001) ぎょうせい p11
- 3) 中間美砂子編『小学校家庭科指導の研究』2001 建帛社 p4
- 4) 日本家庭科教育学会『家庭科はおもしろい—家庭科から総合学習への提案』1999 ドメス出版 p12
- 5) 日本家庭科教育学会『家庭科の21世紀プラン』1997 家政教育社 p17
- 6) (社)日本家政学会 生活経営部会『家庭科教育と生活経営 家庭科教育特別委員会報告書』
- 7) 荒井紀子編『生活主体を育む 未来を拓く家庭科』2005 ドメス出版 p21
- 8) 磯崎尚子、家城潤子「アメリカの家庭科教育におけるキャリア教育に関する研究—教科書分析を中心に—」2006『富山大学人間発達科学部紀要』第1巻第1号 p139-147
河崎智恵『家庭科におけるキャリア教育の開発に関する研究』2004 風間書房
- 9) 磯崎尚子、家城潤子 同上 p140
- 10) 磯崎尚子、家城潤子 同上 p141
- 11) 荒井紀子『生活主体を育む 未来を拓く家庭科』ドメス出版 2005 p71